

はしがき

とりわけ、一本立の外交の正念場を迎えた日本の指導者と国民にとっての至上要請は、独善的で偏狭なナショナリズムを排し、日本の進路の判断にあたって確かな「国際感覚」を働かせることである。ハウス大佐から聞き、吉田の肝に銘じた「国際感覚なき民は滅ぶ」という言葉は、日本国民にとっての外交指針であり、座右銘とすることができる。（細谷千博「外交官・吉田茂の夢と挫折」『中央公論』1977年8月号、『国際政治のなかの日本外交』（細谷千博著作選集②）龍溪書舎、2012に再録）

この本は1945年の第二次世界大戦終期から21世紀初頭までの国際関係の通史的叙述の一つの試みである。本書は2010年に刊行された『国際関係史——16世紀から1945年まで』の続編であり、同様の叙述方法を用いているが、題名を『現代国際関係史——1945年から21世紀初頭まで』と変えているように、前の著作とはいちおう独立した別個の書物として書かれた。

著者はかつて勤務していた大学で、16世紀（世界地理の輪郭が知られるようになった世紀）から現代に至る国際関係史の全般の講義を担当した経験から、そのような講義を一人で担当する教師として単独で通史を執筆することを思い立った。その講義録をもとに、1冊あるいは2冊の通史をまとめることを意図していたが、それを書き進めるうちに、16世紀から第二次世界大戦終了までの部分だけでも厚い本になることがわかったので、1945年までの諸章をまとめて刊行することにしたのが、2010年の前著であった。その本の「はしがき」の終わりの部分で、「あとしばらくの時間が与えられるなら、私は本書と同程度の規模で21世紀初頭までの本書の続編を執筆したい」という希望を述べた。その希望を実現したのがこのたびの『現代国際関係史』である。

前著の「はしがき」の同じところに記したように、第二次世界大戦後の国際政治史については、冷戦史などの形で、すでに何冊かの通史が出版されており、

20世紀初頭から叙述を始めながら世紀後半に重点を置いて20世紀末あるいは21世紀初頭までを扱う通史もいくつかある。

少なからぬ好著がある領域にさらに自著を加えようとするのは、前著の刊行にあたりお世話になった東京大学出版会編集部の奥田修一さんの熱心な勧めもあり、またほかにも多くの方々の励ましを受け、とくに最近はそのを自らの生きがいとを感じるようになったからである。

2011年9月に逝去した細谷千博氏の著作選集が12年9月に刊行され、あらためて氏の論考に接する機会を得た。1977年に書かれた吉田茂論の末尾の文章が私の心に重く響いた。この「はしがき」の最初に置いた文章である。それはまさに2012年の日本人が噛みしめるべき言葉である。われわれは1930年代にそうであったように、「国際感覚なき民」として、ふたたび国際的孤立への道を、滅びへの道を歩んでいるのではないだろうか。戦前のことも大戦中から終戦期にかけてのことも自ら経験している「戦中派世代」の生き残りとして、最近の研究文献をできるだけ参照しつつ、変容する戦後世界の様相のなかで、日本がどのような位置を占め、どのような国際関係を築いてきたのかを顧み、世界史の文脈と組み合わせる記述したいという衝動に駆られて、老軀に鞭打って約半年を過ごした。

『国際関係史』という題は、多面的な国際関係の連環と相互作用を扱う書物にもっとも適当なものであろうが、国際政治と国際関係とは同義的に用いられることも多く、例えば日本国際政治学会も英語名は Japanese Association of International Relations であり、国際政治と国際関係 (International Relations) とは同義に用いられていた。本書では多面的な国際関係をある程度視野に入れて国際政治史を叙述しているので、前著を踏襲して本書も題名を『現代国際関係史』とした。

最近、日本の研究者による国際関係史関連の研究の蓄積が著しく進み、翻訳文献も多くあり、日本語で利用できる膨大な参考文献が存在する。本書を執筆する上で、レフラーとウェスタッド共編の『ケンブリッジ冷戦史』(全3巻、2010)からは冷戦史を超えるグローバルな冷戦史研究として多くを学び、また数冊の通史は歴史叙述のモデルとして参考にしたが、そのほかはほとんど日本で刊行された文献に頼った。

私が本書をまとめることができたのは、なによりも日本における研究の進展とその成果としてのモノグラフ的著作の集積に依拠することができたからである。もちろん、20世紀の国際関係史や冷戦期の国際政治史の何冊かの通史的叙述からも、地域別・国別の国際政治史や対外政策史の通史からも、学ぶところが多く、それらの書物の歴史事象の見方から啓発された。個人的理由により、著述を早くまとめる必要があったため、日本語文献もその一部しか利用できなかったが、もし幸いにして本書の内容に長所と認められるものがあるとするれば、それは日本の研究者の研究成果を部分的にもせよ吸収し活用したからである。学界に対する謝辞のほか、お世話になった多くの方々や諸機関への謝辞を述べたいが、それは私の著者としての目線についてより詳しく説明する「あとがき」のなかに含めることにする。

2012年12月27日

有賀 貞

目次

はしがき i

凡例 iv

序章 ヨーロッパの時代からアメリカの時代へ ————— 1

- 1—第一次世界大戦の勃発と長期化 2
- 2—アメリカの参戦とロシア革命 3
- 3—第一次世界大戦の歴史的意味 5
- 4—遅れた相対的安定の回復と速やかな崩壊 8
- 5—第二次世界大戦の勃発と拡大 12
- 6—第二次世界大戦の歴史的意味 15

第I章 第二次世界大戦終結前後の世界 ————— 21

- 1—戦後を摸索するアメリカ 23
- 2—労働党政権下の戦後イギリス 29
- 3—ソ連におけるスターリン体制の再強化 33
- 4—ドイツ第三帝国崩壊後のヨーロッパ西部 37
- 5—ドイツ第三帝国崩壊後のヨーロッパ東部 42
- 6—日本帝国の敗北と東アジア 47
- 7—東南アジアへの旧宗主国の復帰 55
- 8—南アジア・中東・アフリカにおける第二次大戦と戦後 59
- 9—アメリカとラテンアメリカ諸国 66
- 10—国際連合の発足 68

第II章 ヨーロッパの冷戦とアジアの戦争 ————— 75

- 1—米ソ「冷戦」の始まり 77

2—マーシャル・プランの実現とソ連の自陣営締め付け	83
3—二つのヨーロッパ, 二つのドイツの形成	85
4—ソ連に有利な二つの展開	91
5—朝鮮戦争の勃発と展開	96
6—サンフランシスコ対日講和の成立	105
7—西欧帝国主義の後退	112
8—イスラエル独立とパレスチナ戦争後の中東	117

第三章 西欧帝国主義の終幕と米ソ冷戦の継続 ————— 123

1—米ソ両国における指導者の交代	125
2—1954年ジュネーブ会議とインドシナ休戦	130
3—1955年体制の形成	137
4—ハンガリー動乱とスエズ戦争	145
5—アフリカ植民地の独立	152
6—米ソ・米中関係と中ソ対立の端緒	156
7—第二次ベルリン危機からキューバ・ミサイル危機へ	160
8—日米安全保障条約の改定	166

第四章 ベトナム戦争と米ソ中三国関係 ————— 175

1—米ソ中の対立・対抗関係と米ソ指導者の交代	177
2—アメリカの戦争としてのベトナム戦争	181
3—1960年代の東南アジア・南アジア情勢	189
4—第三次中東戦争（六日戦争）	194
5—中国のプロレタリア文化大革命	199
6—混乱の年としての1968年	203
7—ニクソン-キッシンジャー外交の始動	209
8—ニクソン-キッシンジャー外交の展開	216
9—沖縄返還と日中国交正常化	220

第V章 第三世界の激動と米ソ・デタントの退潮 ————— 227

- 1—第四次中東戦争とその收拾をめぐる国際政治 229
- 2—石油戦略の発動 232
- 3—米軍撤退後の東アジアと東南アジア 237
- 4—ソ連のアフリカ政策とアメリカの対応 240
- 5—人権問題の国際的重要性の増大とカーターの「人権外交」 245
- 6—イラン革命の歴史的意義 251
- 7—経済先進国としての日本 255

第VI章 冷戦の終結 ————— 263

- 1—レーガンとサッチャーの「保守革命」 265
- 2—強いアメリカの再建 266
- 3—ゴルバチョフ革命 268
- 4—ポーランドの共産党支配の弱体化 269
- 5—東欧における共産党支配体制の崩壊 270
- 6—ソ連の解体 271
- 7—冷戦の終結 272

第VII章 冷戦後の国際関係 ————— 275

- 1—冷戦関連の地域紛争の終息 277
- 2—フセインのイラク 278
- 3—湾岸戦争 279
- 4—ロシアと旧ソ連諸国のポスト共産主義体制 281
- 5—冷戦後 NATO-ロシア関係 282
- 6—EUの深化と拡大 285
- 7—北京の天安門事件 286
- 8—日本の停滞と中国の躍進 288

終章 アメリカの時代の終わり ————— 291

- 1—グローバル・エコノミーの形成とアメリカ 292

2—アメリカの対外政策における単独主義志向	294
3—9.11 同時多発テロ事件とアメリカの反撃	295
4—イラク戦争とアメリカの誤算	297
5—金融恐慌によるアメリカの時代の終わり	299

参考文献	303
------	-----

年表	318
----	-----

あとがき	325
------	-----

解題 (佐々木卓也)	331
------------	-----

索引 (人名・事項)	336
------------	-----

序章

ヨーロッパの時代からアメリカの時代へ

● 第一次世界大戦が起こる 1914 年から、第二次世界大戦が終わる 45 年までの約 30 年は、ヨーロッパ優越の時代からアメリカ優越の時代への移行が完了する移行期であった。

第一次世界大戦を引き起こし、アメリカの参戦によってようやく戦争を終わらせることができたヨーロッパは、自らの秩序を再建し、それを維持するためには、アメリカのヨーロッパ政治への継続的な関与を必要としていた。アメリカの大統領ウッドロー・ウィルソンが、アメリカの自由民主主義の国際化を目指す新国際秩序の構想をもって、講和形成に主導的役割を果たしたのは、当然のなりゆきであった。

しかしアメリカにはヨーロッパからの孤立の伝統があり、そのためにアメリカのヨーロッパの戦後問題への関与は限られたものとなった。そしてヨーロッパの脆弱な安定が 1930 年代の経済不況のなかで崩壊に瀕したとき、アメリカはヨーロッパに対する孤立主義的態度を強めた。アメリカが孤立主義からの脱却を図るのは、第二次世界大戦となる戦争がヨーロッパで勃発してからであり、フランスがナチス・ドイツに敗北した後は戦争への関与を次第に深めた。

ヨーロッパの戦争はアジアにおける日本の拡張主義を刺激した。第一次世界大戦の際には、日本はドイツを敵として参戦し、中国における権益を拡大強化することを狙ったが、第二次世界大戦では、すでに中国で戦争していた日本は、ドイツと同盟を結びドイツの優勢に便乗して、東南アジアに進出しようとしたので、日米関係は次第に緊張した。アメリカがこの大戦における完全な参戦国となるのは、日本のパールハーバー攻撃がきっかけであった。イギリスがドイツに屈服せず、ソ連がドイツ軍の侵攻に耐えていたとき、また中国が抗日戦争を続けていたとき、アメリカは国の総力を挙げて参戦することにより、戦争を連合国の全面的勝利に導いた。

この序章は、本書が扱う 1945 年から 21 世紀初頭に至る国際関係の通史的叙述のための前史として、ヨーロッパの時代からアメリカの時代への移行の過程を概観し、● 二つの世界大戦の歴史的意義をまとめる。